

「助けあい」国越えて

阪神・東日本経験「AMDA」瀧崎さん

困った時こそ、国を越えての助けあいを……。阪神と東日本の二つの大震災で被災地へ入った国際医療NGO「AMDA」(本部・岡山市)メンバーで倉敷市出身の医師は、世界中の支援を知って心にそう刻んだ。「今度は私たちが」と、昨年10月にはトルコ東部の被災地へ赴いた。

現在は福岡市早良区に住む瀧崎祐一さん(68)。普段は福岡市内の病院に週3日勤める内科医だ。

昨年10月23日にトルコで起きた地震では、翌24日にAMDAの第1次支援チームの一員として日本を出発。震源に近い東部の都市ワンを経て、車で1時間ほどの北部の町エルジシュに入り、現地のNGOと力を合わせて5日間、けがをしたり、避難生活で体調を崩したりした人を診た。

「日本の被災地は大丈夫ですか」。現地の人たちは、瀧崎さんらが日本から駆けつけたと知ると、そうした言葉をかけてくれた。「自分たちも被災して大変な時に、他人を気遣えるなんて」と逆に励まされた。

製薬会社で研究職をしていた瀧崎さんは36歳で医学部に

トルコ地震支援で派遣

日本を気づかう言葉に励まされ

編入学し、40歳で医師になった。約20年間、新潟の佐渡島や広島、愛媛などの主にへき地で医療に携わってきた。

国際協力に関心を持ったのは1990年。欧州旅行の帰り、トルコのイスタンブールへ立ち寄った。学校に行かず街角で靴磨きをする子どもを目にして、発展から取り残された人々の現実を突きつけられた思いがした。

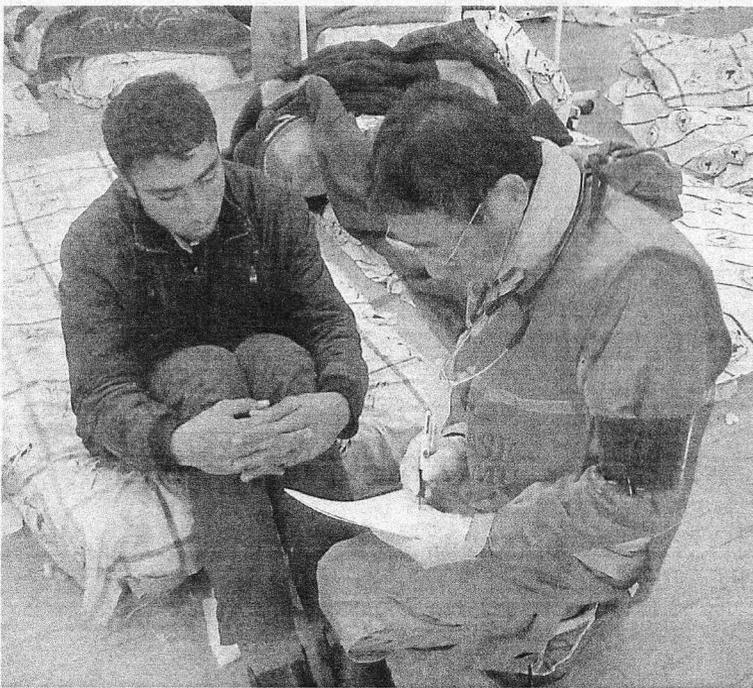
帰国後、国際緊急援助の研修を受け、AMDAに参加。

94年に当時のザイルでルワンダ難民を支援した。以来、マレーシアやインドネシア、パキスタンで災害や感染症流行に対する救援活動を経験した。

17年前の阪神大震災では、1月17日の発生から数日後に神戸市長田区へ。様々なボランティアとの共同作業の大切さ、全体を見渡すコーディネーターの重要性を教わった。若者たちには元気を分けてもらったという。

どの救援現場でも「必要とされている」という実感が力になる。「助けるつもりが、実は助けられてもいるのです」。その手応えがあるからこそ、「この次も」と派遣への心構えをしている。

(佐々木亮)



トルコ東部の地震の被災者から話を聞く瀧崎祐一さん(右) 2011年10月、AMDA提供